

大阪商業大学学術情報リポジトリ

本多利明の著作における海外情報

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2015-09-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森岡, 邦泰, MORIOKA, Kuniyasu メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/56

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



本多利明の著作における海外情報

森 岡 邦 泰

1. はじめに
2. 利明の海外情報源
 - ア. 『華夷通商考』
 - イ. 『采覧異言』及び『訂正増訳 采覧異言』
 - ウ. ロシア関係文献
 - エ. オランダ風説書
3. おわりに

1. はじめに

本多利明(1743-1820)は、「西域物語」「経世秘策」などで、四大急務を説く中で、西洋を理想化しているとも言われている¹⁾。理想化といわれるのは、その西洋観が、現在われわれの知っている西洋の現実の姿とずれているからであろう。では、そのずれはどこから生じたのだろうか。そもそも利明はどこから西洋に関する情報を仕入れたのであろうか。実際、利明の著作を読んでいると、小沢栄一が利明の著作を引用して「ことに右の内、前半のようなことはどこから得てきたのか」²⁾(小沢栄一[1966]40頁)と思わず洩らした言葉と同じような疑問を抱くことが少なくない。こういう問題は、従来、あまり追求されたことがなかった。この問題の追求は、利明の西洋知識がその経世論を成り立たせている根拠になっているので、利明の経世論の成り立ちを探る上でもきわめて重要である。そこで本稿は、その一端を解明しようとするものである。

2. 利明の外国情報源

利明は、当時としてはイギリスにいち早く着目しているが³⁾、理想の国として多くの筆を

1) 例えば、塚谷晃弘・蔵並省自[1970]70頁の注。

2) 引用の前半とはおそらく次の箇所を指すと思われる。「彼両大州(魯齊亜、欧羅巴)は我朝に比すれば寒冷なり、然るに依て彼国の人物皆剛強勇猛にして智恵深く、能く君長に和睦して自己の業事を勤め守る事速なりと、人情親切にして学才あり、また軍量に長せり、又衆の技芸に長せり」(小沢栄一[1966]39頁)。

さいているのはオランダとロシアなので、この二国について見てみよう。またあわせて四大急務のひとつ、属島の開業で、カムチャッカ開発とそこへの遷都が、その属島の開業の眼目であり、またきわめて特異な主張なので、どうしてそういう着想が生まれうるのか、あるいは可能なのか、その背景となる知識も検討したい。

鎖国時代の海外情報の入手は、容易ではなかった。特に西洋の情報はそうである。当時、西洋に関して識者ならば知り得た情報を順次検討してみることにする。

ア.『華夷通商考』

まず『華夷通商考』によって、ヨーロッパの主要国がどう記されているか見てみよう。『増補 華夷通商考』(1708年(宝永5))とは、西川如見(1648-1724)が著した、日本で出版された最初の世界商業地理書である。如見は新井白石と並んで、日本西洋学の先駆といわれる。如見は、天文・暦数・地理などを学び、博学を以て聞こえていた人物である(鮎沢信太郎[1989]73頁)。如見が著したといっても、実際は長崎通詞・林道栄の『異国風土記』をほとんどそのまま版にしたものにすぎない(鮎沢信太郎[1989]74頁)。『華夷通商考』は、刊行されたものだから、新井白石の『采覧異言』や『西洋紀聞』と違い、参照が容易な文献である。

さて、『華夷通商考』によれば、オランダを、「四季寒國」という。単に寒いというだけでなく、続いて次のように書かれている。今の「四季寒國」も含めて引用すれば、「四季寒國也。此國の北海に夜國あり。二千餘里也。其人一目にして頭上に口ありと云。……此等の國は、半年は夜のみ續き半年は晝のみ續て、一歳に一晝一夜の國也。寒極て強く、夜の時は海水皆氷れり。晝半年の時氷海少し解るとぞ。」(西川如見[1944]140頁)。これを読んだ人はどういう印象を持つだろうか。寒国であるということにとどまらず、その北方には、一目の怪物が住み、半年は夜が続くという極寒の地がある。しかもオランダ人はその国と行き来していると、このあと書かれている。読者は、おそらくオランダもこの国よりは寒さが若干ましというだけの極寒の地だと思うであろう。ほかのヨーロッパの国を見ても、「フランカレキ」(フランスか)は、「四季はありても寒き國」(西川如見[1944]154頁)、「ドイツラント」(ドイツか)は、「四季あり。寒國也。」(西川如見[1944]155頁)といっている。

ロシア(「ムスカウベヤ」)に至っては、「大國也。……ヲランダ國の東にて大寒國也。此國夜長く晝短き事多き國也。」(西川如見[1944]156頁)として、大寒国で夜が長いといい、例のオランダ北方の国に近似してくる。利明の時代、ロシアが強大な大国で、その脅威は知られつつあったから、このような大寒国でも強国になれるという実例を提供しているといえよう。総じてヨーロッパは寒い国として描かれている。こういう認識が利明の北方開発の伏線になっている可能性はある。

イ.『采覧異言』及び『訂正増訳 采覧異言』

次に新井白石の『采覧異言』(1713年(正徳3))成稿、1725年(享保10)加筆完成)を見

3) 例えば、カムチャッカを開発すれば、我が国も「エゲレス同様の大良国に有べき」(『西域物語』『大系』141頁、以下同様に塚谷昇弘・蔵並省自[1970]を『大系』と書く)。

てみよう。これは周知のように、白石の世界地理書である（鮎沢信太郎 [1989] 134頁）。潜入した宣教師シドチの取り調べから生まれた。もう一つの白石の西洋に関する著作の『西洋記聞』同様、江戸時代一度も出版されず、明治14年になってはじめて印刷物となって公刊された。しかし『采覧異言』は、国際情勢の変化に因ずるため西洋の事情を知る必要性もあって、西洋の知識を欲する人たちの手によって次々と筆写された。なぜなら当時、これに匹敵する地理書が存在しなかったからである⁴⁾。

それだけでなく、鮎沢信太郎もいうように「人は秘書などという、よけいに、それを見たいのである」（鮎沢信太郎 [1989] 138頁）。それはアンシャン・レジーム下のフランスで、禁書となった本こそ読まれたのと同じようなものだろう。この本は18世紀後半には、京都（1774年）九州（1778年）でも参照されたことが確認できるので、その頃には全国的に読まれるようになっていた⁵⁾。当然、利明も参照していた。

ここでは、便宜上、山村才助（1770-1807）の『訂正増訳 采覧異言』（1802年（享和2））とあわせて見てみよう。なお利明と才助の交友関係はこれまでもつとに指摘されているが⁶⁾、一方、小沢は、西洋の地理・歴史を研究していた山村才助が利明と知友であったことから、その西洋に関する知識も才助を通じて得たのであろうという考えに対して、それは間違っており、そういう事実もあったには違いないが、それははるか後年のことに属する、と音羽塾初期の壮年期（1766～86、24歳～44歳）について語っているが（小沢栄一 [1966] 17-18頁）主著の『経世秘策』と『西域物語』が完成した1798年には、才助は28歳になっており、既に最初の著作も書いているから、少なくともこの頃までには利明は、当時最も西洋の地理・歴史に明かった才助から何らかの情報を得ることもあったと見てよいであろう。才助がライフワークとなる『訂正増訳 采覧異言』を完成するまで、何年もかけてさまざまな洋書を読んでノートを取って知識を蓄えていたと考えられるので、従って、才助の西洋学の集大成たる『訂正増訳 采覧異言』に盛り込まれた知識のどれかは、利明も共有していたと見てよいと考える。

さて、『采覧異言』によって、まずオランダの記述を見てみよう。

「先祖はドイツ人だった。はじめ人々は海上を往来し、漁業を生業とした。人々が日々に多くなった。土地を開拓し、7つの集落に分かれ、スペインに服属した。後にスペインはその強大さを自負して、オランダ人を使役し虐げた。人々はみな、これを怨んで離反した。そして遂にスペインと断交した。スペインは軍隊をもってこれを討伐しようとした。しかし次々と戦いに負けた。オランダはこれによってその勢力を伸張した。そして遂に十州を陥れた。」⁷⁾

利明は、オランダの建国について、『西域物語』で次のように述べている。オランダの

4) 現在『新井白石全集』で、第四巻の中の全部で812-854頁に当たる著作である。頁数も多くなく、全集全体で見ても、パーセンテージが低い。鎖国時代の西洋知識がいかに限られたものであったかがわかる。

5) 京都では西村遠里の『万国夢物語』（1774年）九州では三浦梅園の『帰山録』（1778年）や『五月雨抄』（1784年）（鮎沢信太郎 [1989] 138-139頁）。

6) 例えば、阿部真琴 [1955b] など。

7) 「其先入爾馬泥亞人。初其人來往海上。捕魚爲業。種衆日多。闢拓土宇。分七部落。服屬於伊斯把爾亞焉。及後伊斯把爾亞。自負強大。虐用其人。衆皆怨畔。遂與之絕。伊斯把爾亞。乃擧兵伐之。累戰失利。和絲 是張甚。遂陷其十州。」（新井白石 [1906] 824頁）。

ウィリアム1世が、神聖ローマ皇帝カール5世に、寒冷のため廢地であったアムステルダム
の地を拜領して開業したいと願い出たところ、カール5世は、大いに喜んで、あの土地は寒
冷で流刑の罪人さえも大いに恐れた土地だ、しかるに租税を上納してその領主となること
を乞うとは、見上げた大人物だと言った。ウィリアム1世は大いに喜んで再拜して退出し
た。それからウィリアム1世は本国の神聖ローマ帝国を出立して北方の寒地に向かい、かの
廢地に到着して、アムステル河の河口に飯の館を設けた後、開業を企てた。その土地は幸い
にも北側の片側はみな海沿いである。渡海・運送・交易を以て土民を撫育したところ、大い
になつき付き従った。大河を浚渫し、大城郭をもうけ、そのようにしてその土地を開発し、
今やヨーロッパの三大都市の一つとなったという(『西域物語』『大系』155-156頁)。

利明はオランダも寒冷な土地に移住してできた国で、今や首都はヨーロッパの三大都市の
一つである、とする。カムチャッカも同様に開発できるのに違いないというのである。だか
らオランダの開祖が国業を興した意を用いてカムチャッカを開発すべきだというのである。
カムチャッカとオランダは緯度も等しく、土人の風情、すなわち原住民の性状も同じであろ
う。それどころかカムチャッカ開発は、オランダを興すよりも、速やかに成就するだろう
(『西域物語』『大系』161頁)。なぜならオランダは北方を向いているが、カムチャッカは南
方を向いている、オランダは北海を隔てて、向かい側に他国があり、東にはロシアの大国が
ある。またドイツ、フランスといった強国がある。それに対してカムチャッカは、北方は
「夜国氷海」(この表現は『華夷通商考』を想起させる)で、人倫絶えた土地で自然の要害
である。東方にはおびただしい島々(アリューシャン列島)があり、東は北アメリカに至
る。西方には沿海州、満州等々がある。南方は正面で、「東蝦夷の内二十二島、松前島、日
本国、琉球国、^{そのほか}其外周廻の小島共、皆是古日本カムサスカに属し従ふべき自然具足の島々共
也」(『西域物語』『大系』162頁)という。

つまりオランダの建国とカムチャッカ開発が同一視されているのである。当時、利明のカ
ムチャッカ開発論について、「カムサスカ大良国にして、東洋諸島の主国なかるべき真理を
含めることを説とも、^{とく}会得する人^{えとく}鮮^{すくな}からん」であった(『経世秘策』『大系』65頁)。今から
見れば当然の反応といえよう。当時の人々も「日本の人は、松前の奥は寒国にて、五穀を生
ぜず、住居も^{でき}出来ざる所」と思っていたからである(『西域物語』『大系』132頁)。寒冷地で
あるにも拘わらず、強国を建設可能だという利明の確信はこのオランダ建国の話が根拠に
なっている。それにロシアの事例も付け加えてもいいかもしれない。

このオランダ建国史は、もちろん間違っている。『大系』の注では、利明の記述は史実に
沿わず、虚構的部分を含む、ウィリアム1世(ウィレム1世1533-1584)はもとナッサウ
伯、神聖ローマ皇帝カール5世につかえ、司令官に任ぜられ、55年オランダ他2州の総督に
なる、と記す(『西域物語』『大系』155頁)。利明が一体どこからこの話を仕入れてきたの
か、今のところわからないが、オランダの開祖たるウィリアム1世がもともとドイツの領主
だったことは、史実であり、その点では『采覧異言』は正しい。そして何よりも、『采覧異
言』を見る限り、何もなかった土地にドイツ人が植民して次第に開発して作った国かのよう
に書いてあるが(むろん、実際は古代より開けていた)、この図式は、上記のオランダ建国
史と一致している。才助の『訂正増訳 采覧異言』の、増訳の所の、『万国伝信記事』を訳
したところで、オランダのはじまりは、ドイツ(ゼルマニア)のカッテン(葛天)なるもの

が、ローマ国と盟約を結んで、北海の地に向かい、戦争の末、原住民を追い出し、土木工事を行って数十里の原野を切り開いてヨーロッパに新たに一国を建てたとある（山村才助 [1979] 上、455-456頁）。これは古代の話だと思われるが、この話も利明のいうオランダ建国史と同じ図式である。16世紀のウィリアム1世の場合も、この場合もともにローマと書いてあって、古代ローマと神聖ローマ帝国は、才助においては区別されているが、読んでみると多少わかりにくいところもあるので、あるいは利明は何らかの形でこの情報に接したときに、両者を混同して、オランダ共和国の祖ウィリアム1世の事績とこれらの話を一緒にしたのかもしれない。

また朽木昌綱の『泰西輿地図説』（1789年（寛政元））は、「由来」と題して16世紀のスペインとの戦争からオランダ建国までを史実に正確に素描しているが（朽木昌綱 [1982] 181-186頁）、利明はこの本に言及しているにも拘わらず、そこに書かれたオランダ史は『西域物語』になぜか反映されていないようである。

なお工藤平助は「赤蝦夷風説考」で、オランダのことを「極北国にて、本国の物としては細工ものばかりなり」（工藤平助 [1978] 32-33頁）といていたが、もっと後に出て学術的にもしっかりした『泰西輿地図説』は、州によっては、同書は「此地豊饒ニシテ穀酒菜等ヲ産シ」（朽木昌綱 [1982] 191頁）、「野菜等モ産セリ」（朽木昌綱 [1982] 193頁）と書かれていて、利明の属島開業を支える根拠となり得るものである。

さて、続いて『采覧異言』には、「君主を立てない。軍事はそれぞれの役人に任されている」⁸⁾と書いてあるが、ここに才助は評言を施して、君主がないのではなく、ただ国主の宗族から「年齒功德爵位」などの順次で、擁立している、と述べる（山村才助 [1979] 438頁）。これが書名の[訂正]の意味である。しかし続いて『采覧異言』は「長はみな、国から選ばれ、代わってあとを継ぐ世襲のものはいない。当初より軍功で選ばれるのである。」⁹⁾とあるが、これには按文をつけていない。これは政治体制の問題を含んでいるので、興味深いところであるが、江戸時代、西洋の共和制をどうとらえるのかは、もう少し後世の課題となる。

『采覧異言』は続いて、オランダでは、国に財貨が乏しく、町は海に通じていたので、それでもって不足を補おうと図った。人々は知恵の多い者たちで、天文地理もよく知っていた¹⁰⁾。そしてその航海の道中の自然環境、風俗物産をすべて記録して、世界地図を作った¹¹⁾。その後170年たち、今やオランダ船が行き交う国は、東南300国あまり。商館を設け、商館員をおくところが、30あまりである、という¹²⁾。

これは、小国で財貨も乏しかったオランダが、海外交易と植民地獲得で大国となったという話で、これをオランダモデルと呼べば、利明の四大急務の「諸金」と「船舶」と「属島の

8) 「不建其君。軍國之事。各有司存。」（新井白石 [1906] 824頁）。

9) 「酋帥部長。皆出乎一國之選。無代業相繼者。始自軍興以來。」（新井白石 [1906] 824頁）。

10) 「傾國乏用。通市海外。以圖贖給。俗素多智。兼善天文地理。」（新井白石 [1906] 824頁）。

11) 「道之所經。國地山川。遠近夷險。其地氣風俗物産。皆有誌焉。萬國輿地全圖。所由作也。」（新井白石 [1906] 824頁）。

12) 「厥後一百七十年間。…到今市舶所通。東南三百餘國。而其中設場置務者。三十餘所。」（新井白石 [1906] 824頁）。なおこれに対する才助の按文は、元禄年間にオランダ人が官より通商の地を尋ねられて、35国とこたえており、その国名は華夷通商考に見える、という（山村才助 [1979] 上、422頁）。

開業」の根拠となっているものである。「船舶」、つまり船舶と航海技術を身につけ、外国交易をする、それによって金銀を蓄え、国を富ますことができる(「諸金」)。さらに海外に進出することによって、属島を開業できる。これが利明の国家豊饒策の重要な部分であるが、その根拠となったオランダモデルは、すでに『采覧異言』で、原型が与えられているといえよう。

今度は、山村才助の『訂正増訳 采覧異言』を中心に見てみよう。『訂正増訳 采覧異言』は、周知のように、洋書32種、漢籍41種、国書53種、計126種を参考文献にあげた。そのなかには、今はこの世から消えて名だけ残っているものがいくつもあるという。そして洋書の中で主に依拠したのが、「増訳」の名のもとに出てくる次の2冊、すなわち『万国航海図説』と『万国伝信紀事』であった(鮎沢信太郎[1989]147-152頁)。

さて、同書はオランダを、この国多くは「北海ノ上ニ新ニ築キタル地」であるために、低地である(山村才助[1979]上、458頁)といっている。そのあとにローマの皇帝の話が出てくるが、9世紀の話なので、フランク王国のカール大帝の戴冠の結果だと思われる(同書459頁)。いずれにしろ建国史に関わっていると思われる。その後の歴史については、増訳の所は、基本的に翻訳なので、スペインとの戦争から建国に至るまで正確に書かれている。

オランダの気候は、「融和」で土地が平坦のため、諸穀、諸果のほかを産し、家畜を多く生産する、としており、好印象を与える記述となっている。それに対して、司馬江漢は『おらんだ俗話』で「不毛の国」と述べているが(司馬江漢[1994]120頁) むろん地理学者としては才助の方が上なので、両者と交友関係にあった利明が、才助から後に『訂正増訳 采覧異言』に盛られることになる情報を聞いていたとすれば、オランダモデルにいっそうの信頼を寄せることになるだろう。

ロシアについては、白石の『采覧異言』の記述は非常に少ない。本文は5行で、あと注が活字のポイントを落として割注の形で6行ほどついている。もちろん利明が言及したようなエカテリーナの事績は書いていない。それに対して才助は、漢籍、洋書から大量の引用と翻訳を持ってきて、非常に充実させている。

ロシアの風土は、「深林野地」多くて、不毛ではないが、土地の経営がまれであり、「風俗野鄙」であったが、ピョートル1世が出てから、富国強兵に成功した、と書かれていて(山村才助[1979]上、310-312頁) 朽木昌綱の『泰西輿地図説』におけるロシア記述と同趣旨である。エカテリーナについては、1745年皇太子の妃になったことが書かれている。そして割注で、伊勢の舟人がかつてこの国に漂流し、首都のサンクトペテルブルクでその女帝のエカテリーナ・アレキセウナに拝謁した、そのとき女帝は64歳であった、と記しているが(山村才助[1979]上、321頁) これは大黒屋光太夫のことであろう。エカテリーナ2世については、ほかには格別事績は記されていない。漂流者から最新の情報を得て、割注に記したが、才助が『訂正増訳 采覧異言』で依拠した洋書にはまだそういう新しい情報は載っていなかったのは、参考文献の出版年から見て間違いはない。だから載っているのは、学校を整備したとかという、アンナ女帝の事績までである(山村才助[1979]上、329頁)。

ウ．ロシア関係文献

ここで利明の国家豊饒策のひとつとして、ロシアモデルと呼ぶべきものを考えよう。国土

開発のために火薬を積極的に利用することを、利明は四大急務のひとつ「焰硝」で説いているが、その模範となっているのが、ロシアである。「モスコヒヤの女王エーカテリナなる者大功数ヶ条の内隣国に大湖あり大雨長く毎次に溢水大湖の周廻に溯り万民の難儀是より甚しきはなし時に女王その害を禦ん事を謀り彼大業を用ひ里程十七里の山を穿て大河もなりてより湖水の憂なきのみに非らず河道開けて通船の運送便利を得国民大に悦ひ」¹³⁾とあるように、ロシアは広大な国土を、火薬でもって切り開き開発した、それによって治水を行い、交通も整備した、と見ている。ロシアの事績で利明が特にほめたたえるのが、エカテリーナの治政である。エカテリーナの大徳のゆえに、焰硝も英物も国家のために用いられたという（『経世秘策』『大系』71頁）。現在「天下の大世界、大半モスコビヤに属したるは、只女帝エーカテリナ治世を以^{もってもっとも}最多^もい^が、干戈を用いて征服した土地は少なく、「大徳を博^{はく}布^ふして服^{したが}し^たが^が随^{したが}ふ^が国のみ多し」という（『経世秘策』『大系』71頁）。「徳行を博^{はく}布^ふして国^を得^{うる}を真の属国と」するのが中心で、干戈を用いたのは「内心に迄は至^{いた}る^らるゆへ」であった（『経世秘策』『大系』71頁）。つまり有能な人材の登用、寒冷とはいえ火薬を用いた広大な国土開発、治水と交通の整備、徳を広めることによる属島の開業、つまり文明化作用による領土拡大、これらをエカテリーナの治政に見ている。これをロシアモデルと呼ぼう。利明のカムチャッカ開発は、このロシアモデルとオランダ建國史が根拠となっている。

こういうエカテリーナ像は、エカテリーナを理想化したものだ^とみられてきたが¹⁴⁾、そもそもどうして利明は、こういうイメージを持つようになったのであろうか。また利明のカムチャッカ開発に関して、カムチャッカについて、当時どれほどの情報を人々は持ち得たのであろうか。

エカテリーナは、即位したのが1762年で、利明があげている洋書のほとんどは、それ以前の刊行である。西洋の事情を記した漢籍はもっと古い。しかもエカテリーナ2世は、即位してしばらくはまだ治政が安定していなかったともいわれるので、治政の実績が現れて、それが日本まで伝えられるのは、即位してからかなりたってからであろう。『西域物語』と『経世秘策』の成立が1798年なので、1762年以降に出たもので、1798年までに、当時、蘭学者やこの方面に関心を持つ知識人に参照可能だった文献又は情報を考えてみることにする。

『ベシケレイヒング・ハン・ルユスランド』と当時蘭学者に呼ばれ、重宝された書物がある。レイツ(J. F. Reitz)他が著した蘭書『新旧ロシア帝国誌』(Oude en Nieuwe staat van't Russische of Moskovische Keizerryk, Behelzende eene uitvoerige Historie van Rusland en deszelfs Groot-vorsten. Utrecht, 1744)である。『訂正増訳 采覧異言』には『魯西亜国志』「和蘭ヒリップ撰」として出ている。この書物は当時何度か抄訳されているが、1798年以前で、本論の観点から重要なのは、前野良沢が1793年(寛政5)に抄訳した「魯西亜本紀」である。主にロシア皇帝並びにその一族の編年史部分を中心に翻訳したものである(前野良沢[2010c]42頁)。

「魯西亜本紀」は、1744年の蘭書をもとにしている。しかし1744年以降の皇帝の記述もあ

13) 『自然治道之弁』。宮田純[2009]29頁に引用。

14) 『大系』70頁の注。ここでは、林子平も『海国兵談』で「文武両全の棟梁」と呼んだことが指摘されている。

るので、何か別の本を参照したと思われる。『前野良沢 資料集』の解説には「原書にない訳文も見られるので、おそらく良沢は、他書も参照したのであろう」(前野良沢 [2010c] 42頁)といわれているだけで、どの本を参照したのか記されてはいない。1744年以後の記述は、1762年(宝暦12)にエリザベータが死去し、子がいなかったので甥が後を継いだという記事以降である(前野良沢 [2010c] 113頁)。エリザベータの次の皇帝はピョートル3世なので、「ベテルテテルテ」と記されている者がこれに当たるはずである(「魯西亜本紀」は死去を1763年(宝暦13)と記すが、実際は1762年の6月に殺されている)。そして子がいなかったで、室がこれを継いだとあるが、この室があのかカテリーナ2世(カザリン2世、Ekaterina II, Alekseevna, 1729-1796、在位1762-1796)にはほかならない。「魯西亜本紀」に載っている次の皇帝「カタリナテテウエスデ」がこれに当たるはずである。工藤平助の『赤蝦夷風説考』でも、エリザベータ(「エリサベツト」と書いてある)の即位ところまでは、「ベシケレーの書」にあるが、あとは「ゼオカラヒーにて書きつぐ」(工藤平助 [1978] 45頁)とあり、良沢も1768年(明和5)の書に「是ノ主ノ名ヲ載ルモノアリ」と書いているので(前野良沢 [2010c] 114頁) 前野良沢が参照した他書とはおそらく、当時蘭学者の間でよく知られていた「ゼオガラヒー」に違いない¹⁵⁾。平助は「ゼオガラヒー」の刊行年を1769年としているが(工藤平助 [1978] 40頁)、ピョートル3世の死去した年が良沢の本では1年ずれていたことを考えれば、同様に1年のずれが何らかの間違いで生じたとすればつじつまが合う。エカテリーナが16歳で皇太子ピョートルの後となったのは1745年であり、クーデタで夫を殺し帝位に就くのは1762年なので、1769年刊行の本なら、エカテリーナ即位を載せることができる。しかしエカテリーナの事績については何も述べられていない。その前の女帝、エリザベータなら、「エリサヘトペトロウト」(エリザベータ・ペトロウナ(在位1741-1761)が即位し、「東砂葛へ法政ノ師ヲ差シテ厄勒西亜ノ教ヲ弘メシム ソノ土人悉クコレニ帰依ス コレヨリシテ後彼ノ国民礼節信義アルコトヲ知レリ」(前野良沢 [2010c] 113頁)と業績を述べているのだが。

また「ゼオガラヒー」を訳したと見られている『輿地誌略』にも、1764年に今の女帝、エカテリーナ2世が位に就いたという記述がある(青地盈林宗 [1969] 278頁)が、それ以上詳しい業績は載せていない。

良沢には、カムチャッカに関する地誌の翻訳がある。「東砂葛記」と「東察加誌」がそれで、ともに「ゼオガラヒー」から抄訳されたものと見られている。「東察加誌」(1791年(寛政3))の写本には、利明と記した書き込みがあるようで、「利明推量『カムサスカ』ト云ハカラサト言葉ノ転音ナリ カムサツカ川モ鮭多キ川ナルヘシ」(前野良沢 [2010b] 20頁)と注記されている。この利明が本多利明だとすれば(蘭学者の交友関係からして推察して、そうだと思うが) 利明がこの前野良沢の訳書を熟読していたことになる。

さて「東砂葛記」(1789年(寛政元))には、「冬候久シクシテ、ハヶ月ノ間ナリ、其間南方ノ地ハ雪フル、或一丈余モ積ル、然トモ北ニヨルホト雪ハ少シ」(前野良沢 [2010a] 13頁)と書かれているように寒冷な気候であることは知られていた。続けて「東砂葛記」は、「夏候ハ短シ、故ニ穀少ク、或ハ無処モアリ」(前野良沢 [2010a] 13頁)というが、一部の

15) 詳しくは、岩崎克己 [1940]

土地は「毎年種々ノ田園ヲ作りテ、分ニ応シテ諸ノ穀ヲ収ルナリ」（前野良沢 [2010a] 13頁）とあるように、決して農業が不可能でないと思えるのである。このイメージが利明のカムチャッカ開発論の根拠のひとつだったと思われる。

またこのカムチャッカの地誌は、文明化に触れているところもある。「東砂葛記」では、「ケイセリン、エリサベト」（Keizerin Elizabeth）という女帝は1741年（寛保元）に、その「教法」を送って、原住民を「訓導シテヨリ、委ク帰依尊信シテ、諸ノ礼義アルコトヲモ知ルコトヲ得タリ」（前野良沢 [2010a] 14頁）という。そして「東察加誌」には「一千七百四十一年二、「ロシア」ノ女帝「エリサベト」ヨリ、彼国ノ教法ヲ送りテヨリ、悉コレニ帰依シテ、諸ノ礼法ヲモ知ルコトナリタリ」（前野良沢 [2010b] 23頁）という。これはキリスト教の布教のことだと思われるが、それを文明化ととらえている。利明の四大急務のひとつ、属島の開業が、文明化作用による撫育策であることを考えると、こういう認識が着想の背景にあったと思われる。

次に漂流者・大黒屋光太夫の陳述を、洋書と照合しながらまとめた桂川甫周の『北槎聞略』（1794年（寛政6））を見てみよう。これは、今まで検討してきた文献とはまったく違い、実に詳しくロシアの風俗習慣、生活、風土、人々の生き様を伝えてくれる。ロシアの多くの民族の生活風習、ロシア人の結婚の仕方、光太夫が訪れた娼家の様子まで詳しく書かれている¹⁶⁾。光太夫は、よくこれだけ詳しい情報を持ってきたと感心するし、また読んでいてとても面白い本である。

さてこの本から、本論の問題に関係するところを見てみると、カムチャッカについては、気候きわめて寒く、積雪丈余に及ぶ。9月頃から雪が降り出して、翌年の4、5月頃まで降ることがある。6月の暑中でさえも日本の3、4月の気候であるという（桂川甫周 [1943] 138-139頁）。これを読むと、とても利明が言うように、五穀を産する豊かな国になるとは思えない。また「家系」と題するところには、現エカテリーナ女帝はネメツ（ドイツ）という国の生まれで、今年（1793年（寛政5））御年64歳といっている（桂川甫周 [1943] 199頁）。しかし業績については格別記されてはいない。

『北槎聞略』の凡例で、桂川甫周は、幕府の内命を奉じて書いたもので、このこと自身秘密に属すべきことで、公刊すべき書物ではない、と書いているが（桂川甫周 [1943] 13頁）、実際は、当時蘭学者たちは光太夫と交流し、情報を仕入れていたので、利明も知ることができたであろう。才助がそこで書かれている情報を知っていることは前述した。しかし

16) 「ある年の七月のある日、ベスホロツコ夫妻、トルチニーノフ夫妻……といった人々が光太夫を連れて、ソイマーノフの別荘へ避暑かたがた遊びに行ったことがあるが、その帰り道に散歩かたがた、ぶらぶらと歩いて帰ってきた時、船橋のあたりまで来たときに、トルチニーノフの細君のソフィー・イワーノヴナが……光太夫にむかって、あなたは遊郭に行ったことがあるかと訊いた。光太夫が、まだ行って見たことがないと答へると、かの女は良人に何か囁いて、光太夫を良人と一緒にの車に乗せ、やがてみんなで馬車を急がせながら、とある屋敷に着いた。……一行が椅子に就くと、酒や肴やお菓子などいっぱい出てきた。給仕の少女などは頭に華かな造花など挿して、その化粧の美しさは世の常の人とは思へない程であった。やがて暫くすると若い妙齢の婦人が十九人、花を飾って立ちあらはれ、一行にむかって叮嚀にお辞儀した。……その一人一人のどれもこれも艶麗なること、まことに風にもたへない風情であった。光太夫はあまりのきらびやかさに、ひそかにイワーノヴナに、ここはいったいどなたのお屋敷なのかと訊ねたところが、かの女は眼でおさへて黙ってゐる故、今度はイワーノヴナの侍女に訊ねてみたが、これもただ笑って答へず、光太夫はただあつけにとられてゐた」（表記は一部現代風に改めた。桂川甫周 [1943] 304-306頁）。

カムチャッカのイメージは利明のものとはかなり異なるので、利明がどこまで同書の内容に熟知していたのかは、やや疑問が残る。

エ．オランダ風説書

オランダ風説書とは長崎入津のオランダ船からもたらされた海外情報をいう。これは新たに来朝したオランダ商館長もしくは船長から長崎奉行を経て、幕府に伝えられた(日蘭學会法政蘭學研究會[1977]3頁)。最新の西洋事情の情報を日本に伝えたのが、このオランダ風説書なのである。

利明は「西域物語」で、今は大徳といわれた「エカテリナ」という女帝も逝去したと聞いているので、今こそ蝦夷諸島及びカムチャッカの土地を取り戻す時節だ、と言っている(「西域物語」『大系』161頁)。エカテリーナが死去したのは1796年で、「西域物語」は1798年には成立している。鎖国下で、しかも当時の西洋事情の情報の伝搬を考えると、非常に早く情報をとらえている。塚谷晃弘は『大系』の注で、オランダ風説書などでこれを知ったと書いているが、確かに当時、西洋のことを最も早く知りうる情報源はオランダ風説書しかなかったであろう。

オランダ風説書は、いわば世界ニュースで(「風説」という訳語の原語が、今ならニュースと訳されるところ)、世界各地の状況をリアルタイムで伝えていた。そこにはヨーロッパのどこどこの国が戦争をしているとか、どこの君主が死去したとか即位したとかということが、簡潔に箇条書きで書かれている。そこでオランダ風説書で、どれだけロシアの状況を知りうるか、重要なエカテリーナ2世の治世下に絞って見てみよう。

オランダ風説書の第170号(1765年)に、ロシアがカムチャッカに数万の軍隊を差し向け、合戦に及んだという記述があり(下巻、41頁)、同書の注釈には、ロシアは18世紀にカムチャッカに達したが、土着民から毛皮獣の苛重な納貢を強要したので、1740年代からコリヤーク族 Koriaks ついでカムチャッカのチュクチ族 Chuktsiy が頑強に抵抗し、しばしばロシアの屯営を襲撃したので、守備を強化し1770年代にいたってほぼ鎮圧した、この風説書にある兵員数は過大で、誤聞かあるいは誇張のようである、と記している(下巻、42頁)。これを読んでいると、チュクチ族がカムチャッカを本拠地にしていたかのように思えるが、チュクチ族の本拠地は、もっと北東のベーリング海を臨む当たりで、現在チュクチ自治管区とされているところである。カムチャッカにいたのはイテリメン族で、原住民に対するロシアの圧政が行われていた。前野良沢の「東察加誌」と「東砂葛記」には、先に見たように、エリザベータが聖職者を派遣して、原住民を「訓導」し、ことごとく「帰依尊信」して、「礼義」を知ったとか、「教法」を送って、住民はことごとくこれに「帰依」して、「礼法」を知ったとか、書かれていたが、実際には1745年エリザベータの命令で送られた僧院長の Khotuntsevskiy は、カムチャッカ原住民を改宗させるために弾圧を躊躇しなかった¹⁷⁾。そ

17) 改宗の使命を帯びたこの修道院長は、ひどく頑迷な男で、イテリメン族に先祖伝来の宗教儀式を根絶させ罰するには鞭が有効だと信じていた。1745年の原住民の蜂起に際しては、世俗事項に干渉するのにも躊躇しなかった。公式なソ連歴史家でも「カムチャッカでは、東西シベリアで存在していた、地元行政への最小限のコントロールも欠けていて、地元行政の恣意性と強奪はとりわけ恐るべきものだった」と書いている(Forsyth [1992] p.142)。

の後もカムチャッカは、ロシアの圧政に苦しんだ。ただ、エカテリーナ2世の治世では、宗教的寛容策がとられ、イテリメン族を人間として扱ったというが、そのあとには前以上にひどくなった¹⁸⁾。

「オランダ風説書」第171号（1766年）には、去年カムチャッカにロシアが数万の兵を差し向け合戦に及んだが、さらに15万の兵を差し向け、今は静まったという（下巻、43頁）。

第172号（1767年）にも、カムチャッカで合戦に及んだという記述がある（下巻、45頁）。

第173号（1768年）には、去年申し上げたカムチャッカ国とロシアとの争乱は、それ以後、どうなったかはよく知らないという（下巻、47頁）。

このように、短い風説書の記事で、カムチャッカの事情が紹介されているのが目につく。日本の当局が北方問題に関心が高かったせいかもしれない。

ところで現代の歴史家が描くロシアとチュクチ族との関係を見ると、利明の考えを理解する上で示唆的である。フォーサイスによれば、シベリア史は以下のようである。

1750年代には、チュクチ族との戦争が続いていた。1759年には本拠地から650マイルも離れたカムチャッカに200人のチュクチ族が現れて、14人のコサックを捕まえ、コリヤーク人を殺害し、妻と子供とトナカイを連れ去り、さらにアナディルスク（Anadyrsk）の要塞を包囲した。エカテリーナ2世が即位した1762頃までには、ロシアのシベリア当局にとって、チュクチ族を征服する試みは失敗に終わったのは明らかだった。アナディルスクから国家へ上がる収益は、29,150ルーブルであって、アナディルスクの要塞を維持するための経費1,380,000ルーブルの47分の1にすぎなかった。コリヤーク族の敗北とチュクチ族への攻撃の休止は、トナカイの放牧地をめぐるシベリアの部族の分布図を変えた。1780年代にはチュクチ族はコリヤーク族への襲撃をやめ、それどころか援助さえした。というのは彼らが、ロシアの要塞がその領域に再び建設されるのを防ぐ最後の防壁となったからである（Forsyth [1992] p.149）。チュクチ族はロシア人との交易から得る利益を認識していた、特に鉄製品と火器において（Forsyth [1992] pp.149-150）。1764年以降は、彼らの方からロシア人と接触しはじめた、いくつかの集団は人質を取られないという条件で、進んで貢ぎ物を差し出すようになった。ヤクーツク当局は、1788年以降、アニューイ川（anyui）岸の、コルムスク（Lower Kolymsk）の近くに市場を設けた。そして同年、チュクチ族の土地のまわりの海岸にロシアの主権を示す標柱を立てた。とはいえ、チュクチ族とエスキモーは、完全に服属していない民族として公式に認められていた。彼らは、自分たちの習慣と法に従って生き続けた。ロシア当局は、好戦的なチュクチ族がロシア市民になるように誘うのに、平和的な手段に限定した。主に毛皮との交換に役に立つ贈り物をするとか、チュクチ族の尊敬されている者に公的な外套と剣を与えて首長として優遇するなどである（Forsyth [1992] p.150）。

エカテリーナ2世の宗教的寛容のおかげで、18世紀後半のロシア帝国でほとんど布教活動がなかった。1815年にアレキサンダー1世が思想の自由を投げ捨て、キリスト教化の運動を始めるまでは（Forsyth [1992] p.150）。

18) 1770年代には、エカテリーナ2世によって発布された長い命令書に従って、まじめな誠実さを持った Karl von Böhm が、ロシア兵士を抑制してイテリメン族を人間として扱わせた。しかし1780年代の総督は、悪行さにおいて、Karl von Böhm の前任者たちを凌駕した（Forsyth [1992] p.142）。

つまりロシアは、チュクチ族のように容易に弾圧できず、頑強に抵抗した部族に対しては懐柔策をとったのである。チュクチ族に対して取った政策は、利明の撫育策に近いものである。文明の恩恵を求めてチュクチ族が自らロシア人と接触してきたのも、利明の文明化作用による属島開業計画が描く図式と同じである。しかもエカテリーナ2世の治世で、より寛容になっていることを考えると、利明がエカテリーナ2世を「大徳」の持ち主と考えたのは、あながち間違っていない。ただ風説書を見る限り、そうした情報はない。

エカテリーナ2世の死去の知らせは、第200号(1797年)の風説書に見えていて、1798年の『西域物語』は、おそらくこの情報を入手したものだろう。オランダ風説書は、幕府が海外情報を入手するためのものであるが、実際にはさまざまな経路から、内容が漏れていたのは、これまでの研究が示すとおりである¹⁹⁾。

3. おわりに

これまで、本多利明の『西域物語』、『経世秘策』などの主著の西洋認識が、どういう背景があるか、どこまで妥当かを見てきた。ロシア観などについては、まだ論じる余地があるので、それは別稿に委ねたい。

なお本研究は、研究課題「近世日本の経済思想の諸相と西洋思想との接点」、JSPS 科研費24530221の助成を受けたものである。

【参考文献】

一次資料

青地盈林宗 [1969] 「輿地誌略」 国書刊行会編『文明源流叢書』第一、所収、名著刊行会。

新井白石 [1906] 「采覧異言」 新井白石『新井白石全集』第四、所収、吉川半七。

桂川甫周 [1943] 『北棧聞略』 竹尾弼譯、武蔵野書房。同 [1989] 『北棧聞略』 亀井高孝 校訂、吉川弘文館。

朽木昌綱 [1982] 『泰西輿地図説』 青史社。

工藤平助 [1978] 「赤蝦夷風説考」 寺澤一・和田敏明・黒田秀俊編『赤蝦夷風説考・三国通覧図説・赤蝦夷動静』(北方未公開古文書集成) 第三巻、所収、叢文社。

後藤梨春 [1969] 「紅毛談」 国書刊行会編『文明源流叢書』第一、所収、名著刊行会。

司馬江漢 [1994] 「おらんだ俗話」 司馬江漢『司馬江漢全集』第三巻、所収、八坂書房。

塚谷晃弘・蔵並省自 [1970] 『本多利明 海保青陵』 日本思想大系44、岩波書店。

日蘭学会 法政蘭學研究会 [1977] 『和蘭風説書集成』上巻、吉川弘文館。

日蘭学会 法政蘭學研究会 [1979] 『和蘭風説書集成』下巻、吉川弘文館。

林子平 [1978] 「三国通覧圖説」 寺澤一・和田敏明・黒田秀俊編『赤蝦夷風説考・三国通覧圖説・

19) 例えば、日蘭学会 法政蘭學研究会『和蘭風説書集成』上巻の解題。その後も同種の研究はさまざま発表されている。

赤蝦夷動静』（北方未公開古文書集成）第三巻、叢文社。

林子平 [1989] 「海国兵談」住田正一編『日本海防史料叢書』クレス出版、第1巻。

西川如見 [1944] 『日本水土考・水土解辯・増補 華夷通商考』岩波文庫。

前野良沢 [2010a] 「東砂葛記」大分県立先哲資料館編『前野良沢 資料集』（大分県先哲叢書）第3巻。

前野良沢 [2010b] 「東察加誌」大分県立先哲資料館編『前野良沢 資料集』（大分県先哲叢書）第3巻。

前野良沢 [2010c] 「魯西亜本紀」大分県立先哲資料館編『前野良沢 資料集』（大分県先哲叢書）第3巻。

山村才助 [1979] 『訂正増訳 采覧異言』上、下、青史社。

二次資料

秋月俊幸 [2014] 『千島列島をめぐる日本とロシア』北海道大学出版会。

阿部真琴 [1955a] 「本田利明の伝記的研究(一) 附「本田利明著作目録」」『ヒストリア』第11号、66-78頁。

阿部真琴 [1955b] 「本田利明の伝記的研究(二) 附「本田利明著作目録」第二部」『ヒストリア』第12号、80-91頁。

阿部真琴 [1955c] 「本田利明の伝記的研究(三) 附「本田利明著作目録」第三部・第四部」『ヒストリア』第13号、99-112頁。

阿部真琴 [1956a] 「本田利明の伝記的研究(四)」『ヒストリア』第15号、54-60頁。

阿部真琴 [1956b] 「本田利明の伝記的研究(五)」『ヒストリア』第16号、48-55頁。

阿部真琴 [1957] 「本田利明の伝記的研究(六)」『ヒストリア』第17号、61-66頁。

鮎沢信太郎 [1980] 「本多利明の外國地理学」鮎沢信太郎『地理学史の研究』所収、原書房。

鮎沢信太郎 [1989] 『新装版 山村才助』吉川弘文館。

石山洋 [1957] 「大地理師ヒュブネルをめぐる 近代地理学の曙と蘭学(その2)」『上野図書館紀要』（国立国会図書館支部上野図書館編）、33-56頁。

板沢武雄 [1959] 『日蘭文化交渉史の研究』吉川弘文館。

岩崎克己 [1940] 「ゼオガラヒーの渡来とその影響」『書物展望』10(12) (114) 22-30頁。

岩崎克己 [1941a] 「ベシケレイヒング・ハン・ルースランドの流傳と翻譯(一)」『書物展望』11(11) (125) 2-10頁。

岩崎克己 [1941b] 「ベシケレイヒング・ハン・ルースランドの流傳と翻譯(二)」『書物展望』11(12) (126) 6-11頁。

内田秀雄 [1935] 「地理学者としての本多利明」『地理論叢』第7輯、1-30頁。

川村博忠 [2003] 『近世日本の世界像』ペリかん社。

小沢栄一 [1966] 『近代日本史学史の研究 幕末編』吉川弘文館。

開国百年記念文化事業会 [1978] 『鎖国時代 日本人の海外知識 世界地理・西洋史に関する文献解題』原書房。

キーン、ドナルド [1982] 『日本人の西洋発見』芳賀徹訳、中央公論社。

佐藤昌介 [1980] 『洋学史の研究』中央公論社。

助野健太郎 [1978] 「山村才助と西洋史研究 『西洋雑記』をめぐって」『聖心女子大学論叢』51集、5-32ページ。

谷治正孝ほか編 [2006] 『デラックス世界地図帳』昭文社。

前田勉 [2009] 『江戸後期の思想空間』ペリカン社。

宮田純 [2002] 「本多利明の国家再生論に関する一考察：カムサスカ開発論を中心に」『中央史学』(25)、64-88頁。

宮田純 [2009] 「本多利明の経済思想 寛政7年成立『自然治道之弁』の総合的研究」『アジア・日本研究センター紀要』(5)、19-41頁。

森岡邦泰 [2009] 「海保青陵の政治言説における能力原理」『大阪商業大学論集』第151・152号、247-261頁。

Forsyth, James [1992] *A History of the Peoples of Siberia: Russia's North Asian Colony 1581-1990*, Cambridge, Cambridge University Press.